

問題3 空欄の字を埋めて、物語をくずし字で読んでみよう。

美しいかぐや姫に、五人の貴族が熱心に求婚しました。しかし、結婚の条件とされた課題を誰も果たせません。帝からの求婚にも、かぐや姫は応じませんでした。そして、三年ほどたったころ、かぐや姫は月を見て泣くことが多くなりました。翁がその理由を尋ねると、かぐや姫は「私は……、



8 き の 9 や こ 10 人 11 り。

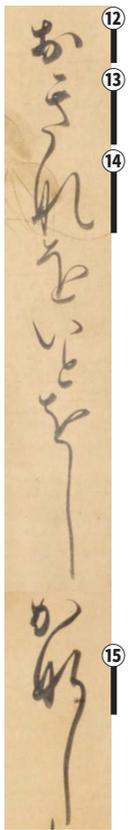
はちがつじゅうごにち 八月十五日には迎えが来て、帰らなければなりません。」と答えました。



★求婚者に難題を課すかぐや姫。

問題4 空欄の字を埋めて、物語のつづきをくずし字で読んでみよう。

翁からそのことを聞いた帝は、多くの兵で守らせました。しかし、天人たちが降りてくると、人々には戦う気持ちはなくなっていました。かぐや姫は泣き悲しむ翁たちに別れを告げます。天人がかぐや姫に天の羽衣を着せると、かぐや姫は……、



12 を、 13 「い と を(ほ) し、 14 か 15 し。」

と思うこともなくなり、そのまま天に昇っていきました。落胆した帝は、かぐや姫から渡された不死の薬と手紙を、天に近い山で焼かせました。



解答

問題1 ①る(流)、②つ(徒)、③け(遣)。「名をば、さるきのみやつことなんいひける」。*「む」は、「ん」とも表記されます(解説参照)。

問題2 ④す(春)、⑤か(可)、⑥み(為)、⑦た(多)。「三寸ばかりなる人、いと美しくてゐたり」。

問題3 ⑧つ(徒)、⑨み(三)、⑩の(能)、⑪な(奈)。「月の都の人なり」。

問題4 ⑫お(於)、⑬ぎ(幾)、⑭な(那)、⑮な(那)。「翁を、『いとをし、かなし』。*「いとをし」の歴史的仮名遣いは「いとほし」(解説参照)。

教材について

ねらい ①くずし字で『竹取物語』の絵巻を読むことで、日本の文字表記や仮名遣いの歴史にふれる。

時間配分 35分。授業時間 5分(くずし字の説明)、15分(問題1・2)、15分(問題3・4)。

対象教科 国語、書写・書道、美術

問題解説

平安時代初期に成立したとされる『竹取物語』は、「物

城郡河合町)か、とし、「散吉」と記すものもありますが(『新編日本古典文学全集』)、現代の教科書の多くは、「さぬき」あるいは「讃岐」としています。

このように、有名な古典作品の冒頭文でさえ、昔の人が読んでいたものと、現代の私たちが目にするものとは異なることが多いのです。教科書に載っている古典作品の本文は、多くの学者たちによって校訂(異本と照合したり語学的に検討したりして、よりよい形に訂正すること)されたものなのです。小中学生では難しいかもしれませんが、高校生以上には、このような本文の校訂についても、説明を添えても良いかもしれません。

また、解答箇所ではありませんが、問題文の「なん」は、古典文法を習った高校生以上になると、気になる人もいるかもしれません。教科書では「なむ」と記されていますが、「なむ」は鎌倉時代以降に「なん」と表記されました。文法書には助動詞「む・むず・けむ・らむ」や、助詞「なむ」などの欄には、括弧付で「(なん)」のように、「ん」が記されていますが、それは後世の表記を示しています。教科書では作品の成立時期の文法に統一してい

語の出で来はじめの祖(『源氏物語』)と位置づけられ、授業で誰もが一度は習う作品です。そのため、くずし字入門教材としてもびったりです。くずし字になじみのない人でも、知っているあらずじから、答えを考えることができるためです。また、問題を解いてみると、教科書と違っているところに気づく人もいるでしょう。なぜ違っているのかという疑問から、本文校訂の過程や、日本の文字表記や仮名遣いの歴史にも、浅くも深くもふれることが可能です。

問題1

竹取の翁の名前を紹介する有名な冒頭文です。

答えは「名をば、さるきのみやつことなんいひける」(翁の名は、讃岐の造といたのである)ですが、傍線箇所が、教科書と違っています。「さるき」は教科書では「さぬき」とありますが、昔の『竹取物語』には、しばしば「さるき」と記されています。これは「さぬき」という音が訛ったものと言われています。竹取物語は奈良時代以前の飛鳥・藤原京の時代を舞台にしているため、地名も大和が中心となっています。そのため、現代の注釈書のなかには、「さぬき」は大和国広瀬郡散吉郷(現在の奈良県北葛

るため、教科書の『竹取物語』では、「ん」の表記を見かけることはありません。しかし、このくずし字教材は、江戸時代に作られた絵巻から作成しているため、後世の表記が見られるのです。このように、くずし字教材で古典作品を読むことで、日本語の表記の変化についても実例を示しつつ説明することが可能です。

文字の解説ですが、①は「る(流)」です。②は「つ(徒)」で少し難しいのですが、徒然草の「つ」と覚えると良いでしょう。③は「け(遣)」ですが、「き(幾)」とよく似ているので注意が必要です。

問題2

『竹取物語』で印象的な場面の一つ、翁が竹の

なかにかぐや姫を見つげるところです。現代では、竹のなかでかぐや姫が座っている様子が描かれるのが一般的ですが、そのような挿絵は少なくとも江戸時代前期まではほぼありません(例外として、アイルランドのチェスター・ピーティ図書館所蔵の絵巻には、竹に入ったかぐや姫を翁が自宅へ持ち帰る様子が描かれています)。ほとんどの場合、挿絵の第一場面は、図Aのような、家に連れ帰ったかぐや姫を籠(あるいは箱)に入れて、お爺さんとお婆さんが

見守っている様子が描かれています。このように、挿絵の描かれ方が現代と違うことも、和本を用いることで説明することができます。ここで、「竹筒のなかにいるかぐや姫の絵は、なぜ描かれなかったのか」という、発展的な問いを示すのもよいかもしれません。

さて、くずし字問題の答えは、「三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり」（三寸ばかりの人が、たいそうかわいらしい姿でそこに座っている）です。「三寸」は約九センチですが、『竹取物語』のなかで、「三」は特別な意味を持つ数字として使用されていると言われます。発見時のかぐや姫の大きさは「三寸」、そのかぐや姫は「三月」で一人前に成長し、帝からの求婚を断って「三年」後に月へ帰って行くのです。

④は「す(春)」、⑤は「か(可)」です。⑤の直前の「は」は漢数字の「八」が字母(それぞれの仮名の元となった漢字)です。⑥は「ぬ(為)」、⑦は「た(多)」で、いずれも頻出の変体仮名です。

暗唱している人も多い場面ですので、くずし字を見なくても答えられるかもしれません。問題を解く様子を見

月から迎えに来た天人がかぐや姫に天の羽衣を着せると、かぐや姫にある心の変化が起きます。

答えは、「おきなを『いとをし、かなし』(翁を「気の毒だ、不憫だ」)です。天の羽衣を着たことで人の心を失ったかぐや姫は、翁を気の毒に思う気持ちもなくなり、天へ帰って行きます。⑫は「お(於)」、⑬は「き(幾)」、⑭⑮はどちらも「な(那)」です。「那」は「礼」のなども似ているので注意が必要です。

解答箇所ではありませんが、問題文に「いとをし」とあります。ここは、「いとほし」が歴史的仮名遣い(平安時代中期、仮名が成立した頃に用いられた古文を基準にした仮名遣い)としては正しいとされます。ただし、このように書物によって仮名遣いが異なることは和本の世界ではよくあることです。教科書では歴史的仮名遣いに統一されていますが、例えば、契沖仮名遣い(過去の文献にいろいろなところを求める仮名遣い。契沖の『和字正濫抄』の方式によるもの)が浸透したのちも、多くの公家たちは定家仮名遣い(鎌倉時代、藤原定家が定めたといわれる)を使い続けました。このように、その立場によって仮名遣い

で、場合によっては、字母も一緒に答える問題に変えるなど、難易度を調整することもできます。

問題3 五人の貴族がかぐや姫へ求婚しますが、結婚の条件として課された難題を誰も果たせません。帝からの求婚にも、かぐや姫は応じませんでした。それから三年ほどたったころ、かぐや姫が月を見て泣くことが多くなり、翁がその理由を尋ねたところ、かぐや姫が正体を明かす場面です。

答えは、「つきのみやこの人なり」(月の都の人なのです)です。かぐや姫が泣いていたのは、八月十五夜に迎えが来て、月へ帰らなければならなかったためでした。⑧は「つ(徒)」で②の復習問題です。⑨は「み(三)」ですが、「え(衣)」にも似ていますね。⑩は「の(能)」で頻出の変体仮名です。⑪は「な(奈)」ですが、「る(留)」と間違えやすいです。似ている文字がある場合は、文脈で判断することも大切です。

問題4 月の迎えが来ることを聞いた帝は、兵で屋敷を囲んで守らせませんが、防ぐことはできませんでした。この問題は、翁とかぐや姫の別れの場面からの出題です。

を使い分ける時代があったのです。「いとおし」(定家仮名遣い)、「いとをし」(契沖仮名遣い)、「いとほし」(歴史的仮名遣い)のように、契沖仮名遣いと歴史的仮名遣いが一致しないこともあります。くずし字教材によって、こういった仮名遣いの歴史にもふれることができます。また、離別の場面は、月の使者が館に来る「到来図」と、図Dのように、月の使者とともにかぐや姫が天へ帰る「昇天図」のいずれかで描かれます。『竹取物語』の複数の挿絵を比較して、その違いを考察する発展的な問いを示すこともできるでしょう。

教材解説

底本は国立国会図書館所蔵本で、江戸時代に作成された三巻三軸の豪華な卷子装の絵巻。『竹取物語』には古写本が少なく、底本の詞書も正保三年(一六四六)刊の整版に近いとされます(同館解題)。教材作成には、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている上巻と下巻の画像を使用しました(https://dl.ndl.go.jp/pid/1288448/ DOI: 10.11501/1287221/ 10.11501/1287166)。 (担当: 加藤 枝)

